

## アウグスティヌス『神の国』における救済論

渡邊蘭子

### 序

イエスが語った「神の国」の救済は、「今すでに」現在実現されているのか、あるいは「いまだなお」未来において実現されなければならないのか。この問いはキリスト教にとって中心的な問題であり、キリスト教思想は今日までその二つの間を行き来してきた。そして、20世紀に出た結論は、その両方が語られるべきであるというものであった<sup>1</sup>。そして今なお議論は続けられている。

それらの議論の基礎付けを行ったのが、西方キリスト教の最大教父であるアウグスティヌス(354-430)である。アウグスティヌスも現在的終末と未来的終末の両方を語っており、前者は中世に引き継がれ、教会と国家のあり方を規定すると共に、後者も中世を経て、ルターーの思想基盤を形作り、宗教改革の原動力ともなった。しかし、アウグスティヌスはその両方を語ったのであり、どちらか一方を強調して主張することは、アウグスティヌスの思想の歪曲化である。アウグスティヌスのテキストの厳密な分析が重要であることは、その思想の後世への影響を考えれば明確である。

そこで本稿では、アウグスティヌスが終末との関連で救済をどのように捉えていたのかを考察する。分析の観点はさまざまあるであろうが、特に本稿では、現世の救済と来世の救済という軸を中心に据えたい。アウグスティヌスは、受洗前の初期の時期から救済について論じており、中期、後期に至るまでさまざまな救済論を提示した。しかし、現世の救済と来世の救済の違いについて、アウグスティヌス自身が自覚して考察しているのは、後期のペラギウス論争期の著作においてである。その中でも『神の国』は晩年の著作であり、その最終4巻においては、宗教的思索の頂点に達したアウグスティヌスの救済観を感じとることができる。よって本稿では、アウグスティヌスの『神の国』最終4巻を中心に考察していく。

構成は以下の通りである。第1章では、『神の国』の著作の説明と、本著作の主題である「神の国」と「地の国」の基本的構造の分析を行う。第2章では、アウグスティヌスの現在的終末論の主張を考察する。そして、その救済が未完結であると述べていることにも注目する。そして、第3章ではそうした未完結な現世の救済が、来世においてどのように完成すると述べているのかについて考察する。最後に本稿のまとめを行い、今後の展開を示すことに

よって結びとしたい。

## 第1章 『神の国』の概要

### 1-1. 著作について

アウグスティヌスが自身の著作について説明している『再考録』(Ⅱ, 43)によれば、『神の国』は、410年のゴート族によるローマ陥落という出来事に際し、この原因をローマ古来の神々の崇拝を禁じたキリスト教に帰そうとする異教徒たちに対する弁証という意図をもって書き始められた。しかし、およそ14年(60歳から73歳)にわたる長年の著述の間に、それは単なるキリスト教弁証の域を越えて、積極的にキリスト教の真理を提示する方向へと発展した。すなわち、世界の創造から終末に至る人間の歴史の意味を問い、その歴史を通じて示される神の意図を明らかにしようとする方向へと向かっていったのである<sup>2</sup>。

また『再考録』では、アウグスティヌス自身が『神の国』の構成について語っている。著作はまず前半と後半に分けられる。前半10巻は、キリスト教を非難・攻撃する者に対する反駁が意図されている。ここでは特に、キリスト教と異教との道德性が対比され、また異教神学の批判と論駁が試みられる<sup>3</sup>。後半12巻は、他の説を反駁するだけで自分の説の確立を怠ったというそしりを受けないために、自身の説の積極的主張のために書かれた。(また当時のキリスト教徒たちの中にも、ローマ略奪によって世の終わりの前兆を感じ、動揺する者が多かったが<sup>4</sup>、そのことも一つの原因と思われる。)ただし、この後半においても反対者を駁することを怠らなかったという。そして、後半はさらに三つの部分に分けられる。後半の最初の4巻は「神の国」と「地の国」という二つの国の起源を、次の4巻ではその経過あるいは発展を、最後の4巻はそれら二つの国のふさわしい結末を論じたと述べる。本稿ではこの最後の4巻(19巻から22巻)を中心に扱う。

### 1-2. 「神の国」と「地の国」

次に、アウグスティヌスの救済観の前提である「神の国」と「地の国」の基本構造について考察する。

アウグスティヌスは「神の国」と「地の国」をどのように区分するのだろうか。一見すれば、「神の国」が地上の教会を意味し、「地の国」がローマ帝国を指しているようにも思える。しかし、アウグスティヌスにとって二つの国は、そうした単純な図式で説明されるようなものではない<sup>5</sup>。アウグスティヌスは、「国」(*civitas*)をその領土や機構の点からではなく、人間の意志という観点から捉えている。この二つの国の相違は「愛のあり方」なの

である。アウグスティヌスは「したがって、二つの愛が二つの国をつくった。すなわち、神をないがしろにするまでの自己愛が地の国をつくり、自己をないがしろにするまでの神への愛が天の国をつくったのである<sup>6</sup>。」(14, 28)と語る。神の国の民は「霊に従って生きることを欲する者たち」であり、それは神に従って生きるということである。地の国の民は「肉に従って生きることを欲する者たち」であり、それは人間に従って生きることを指している(14, 9)。

この二つの国は、世界の終末における最後の審判を経て、それぞれ完成した姿で見られるときには、相互に激しい対立があるが、世界の創造から終末に至る間の、この地上における姿で見られるときには、相互にもつれ合い、混合している<sup>7</sup>。よって「神の国」が現世の教会を指し、「地の国」が国家を指すという単純な図式ではない。

それでは、アウグスティヌスは教会と国家をどのように捉えるのだろうか。

#### (1)教会

アウグスティヌスは可視的教会がそのまま神の国であるとは言わない。そこは神の国と地の国が混ざっている場なのである(20, 9, 20, 25)。たしかに、可視的教会を神の国と同一視している箇所がないわけではない<sup>8</sup>。実際、現実の地上の教会には sacrament が存在しており、それによって神の国と結ばれてはいる。しかし、そこには救いに予定された者も予定されなかった者も混在している<sup>9</sup>。やがて両者は分離されるが、現在の教会の中にはいわゆる小麦も毒麦も混在していて区別がつかない(20, 9)。教会の中にも、支配欲、差別、偽善、悪、不義、憎しみ、争いといった罪があるからである。人間自体に罪が存在するゆえに、その人間たちが集まった教会に罪が存在しないはずはないのである<sup>10</sup>。こうした意味で、アウグスティヌスは歴史における教会を聖なる場とみなすだけではなく、地の国の影響が浸透している場とも捉えた<sup>11</sup>。「神の国」に等しい真の教会は、世界の創造以前に予定され、かつ選ばれた者たちから成るものであって、可視的教会はその状態とは異なる(20, 8)。アウグスティヌスはこのように、可視的教会と目に見えない天の教会である神の国は、重なる部分はあったとしても、全く同じものとは考えていない。

#### (2)国家

それでは、国家についてはどうであろうか<sup>12</sup>。アウグスティヌスは、ローマ帝国を直ちに地の国とはみなしていない。ローマ帝国も神の国と地の国が混ざり合ったものなのである。

当時、ローマ帝国をダニエル書7章に書かれている4つの獣のうちの最後のものと同一視し、悪魔の国とみなす者たちがいたが<sup>13</sup>、アウグスティヌスはそうした立場をとっていない。

アウグスティヌスは、王や、王子、長官として国に仕えている人々の中にも、神の国の構成員が見つかるかもしれないとさえ述べる<sup>14</sup>。

また、当時はそうした黙示文学的見解以外に、もう一つの帝国に対する見方が存在していた。それはローマ帝国の歴史を神の摂理との関係で解釈し、その歴史上における特別な意義を認める立場である。当時は、キリスト教が公認され、キリスト教徒の皇帝が現れた時代である。それゆえ、同時代の多くの者たちはローマ帝国を神聖視した。代表的なのはオリゲネスの弟子カイサリアのエウセビオスである。エウセビオスは、コンスタンティヌス大帝の支配を神の計画の一部であると主張した。また、アウグスティヌスの師であったアンブロシウスや、彼の弟子スペインのオロシウスもこの立場をとっていた。さらにプルデンティウスは、キリスト教を国教にしたテオドシウスを評価し、ローマが神の特別な恩寵を受けているという帝国神学を提唱した。そして、アウグスティヌスも初期にはこの立場をとっていたのである<sup>15</sup>。しかし、410年の出来事以来、歴史について熟考しはじめ、ついにはこの立場を批判するようになる<sup>16</sup>。そして、ローマ帝国は神の摂理の道具ではなく、また悪魔的なものでもない、という中立的な立場をとるに至る。

以上のことから分かるように、アウグスティヌスは国家を神の国と地の国のどちらかに振り分けるのではなく、両者の混合とみなしている。

したがってアウグスティヌスにとっては、地上の教会もローマ帝国も、どちらも「神の国」と「地の国」の混合である。どちらも罪に向かう傾向性を持っており、同時にどちらも聖性の可能性を持っている<sup>17</sup>。

しかし、ここで疑問が生じる。どちらもそのような混合体であるとするならば、教会の意義をどこに見いだせばいいのであろうか。これに対し、アウグスティヌスは、可視的教会はキリストの現存ではないにしても、キリストの現存の「しるし」として特別な意味を持つと主張する<sup>18</sup>。その根拠として、キリストが「見よ、私は世の終わりまでいつもあなた方と共にいるであろう」（マタ28：20）と述べた箇所をあげる。現在でもキリストと聖徒たちが教会を支配しているのである。（この点については次章で詳しく述べる。）それゆえ、教会が今でも「キリストの王国」とか「天の王国」と呼ばれる（20, 9）。地上の教会は神の国の代表であり、天上の神の国が地上世界に侵入できる唯一の地点である<sup>19</sup>。このようにアウグスティヌスは、地上の教会を軽視しているのではなく、ある重要な意味を与えているのである。

以上、アウグスティヌスが神の国と地の国をどのように捉えていたかを分析した<sup>20</sup>。教会と国家は、どちらも現世にある限り罪ある人間を抱えており、神の国と地の国の混合である。

そこには人間の意志が中心的な問題であるという思想が通底している。しかし、アウグスティヌスは教会に意義を与えることを忘れなかった。

## 第2章 現世における救済

### 2-1. 現在的終末論

前章では、アウグスティヌスが地上の教会を相対化しながらも、キリストがその教会を聖徒たちとともに支配しているとみなしていることを述べた。それは、現在においても、教会ですでに終末が現存していることを意味している。こうした終末観は、グレゴリウス・マグヌスをはじめ、中世前期の多くの思想家たちの間でほとんど不動なものとして受容された<sup>21</sup>。本章では、アウグスティヌスのそうした現在的終末論について考察していく。

アウグスティヌスは、現在において起こる終末をヨハネ黙示録の千年王国の記述を独自に解釈しながら説明する。ヨハネ黙示録20章1節から6節では以下の事柄が描かれている。キリスト教の傑出した聖徒たち（殉教者）が復活し、彼らはキリストと共に千年の間支配する。これが第一の復活である。その他のものたちはこの千年の期間が終わってから、各々の仕業に応じて裁きを受けるために生き返る。これが第二の復活であり、永遠の喜びまたは永遠の苦しみのための万人の復活である。よって通常、この二つの復活は、どちらも未来において起こると解釈される。

しかしアウグスティヌスは、聖徒たちの第一の復活は現世においてすでに起きていると解釈する。その根拠として、キリストの言葉、「死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。」（ヨハ5：25-26）を取り上げる。アウグスティヌスによれば、ここでの「今やその時である」という言葉が重要である。別の箇所ヨハネ5：28-29では、キリストが善人の生命の復活と悪人の裁きについて述べるが、ここでは「今やその時である」とは言わない（20, 6）。それゆえ、5：25-26の箇所では、キリストは現在起きている魂の復活のことを言っているはずであると主張する<sup>22</sup>。この魂の復活は、洗礼によって信徒が霊的に再生することである（20, 6, 2）。

アウグスティヌスはさらに、ヨハネ黙示録の第一の復活が、現在起きている信徒の魂の復活であることを論じていく。第一の復活は未来の身体的な復活ではないかと疑う者たちは、特に「千年」という数によって惑わされたのだらうと述べる（20, 7）。アウグスティヌスはその「千年」を文字通りに受け取るべきではないと考える。アウグスティヌスもかつては文字通りに解釈しており、最後の審判の前に千年王国が起こるという前千年王国説を信じていた<sup>23</sup>。しかし、いまやそれをかつての見解であったとして退ける<sup>24</sup>。その代わりに「千年」

についての二つの解釈を提示する。一つ目が、ヨハネが「千年」を現在とし、千年のまだ残りの部分を「全体によって部分を表すような語り方で」千年と呼んだという見解。二つ目が、ヨハネが「千」という数字によって「時の充実」に注目させようとしたという見解である(20, 7, 2)<sup>25</sup>。どちらにしても、「千年」という言葉を字義的にではなく比喩的に解釈することを勧めている<sup>26</sup>。そうすると、「千年」は文字通りの時間の千年間ではなく、キリストの復活と再臨との間にある期間を意味する象徴的な数字となる<sup>27</sup>。ここから、千年王国が霊的、天的なものとして現在存在していることになるのである(無千年王国説)。アウグスティヌスはそのことに関して以下のように語る。

それゆえ教会は今でもキリストの王国であり、また天の王国である。従って、今でもキリストと共にその聖徒たちが支配している。確かに、彼らがかのときに支配するのは別の仕方によってではあるが。教会においては、小麦と共に毒麦が成長しているとしても、毒麦がキリストと共に支配することはない(20, 9, 1)<sup>28</sup>。

アウグスティヌスは、未来に設定されていた聖徒たちによる千年の支配が、教会において現在起きていると述べる<sup>29</sup>。このように、アウグスティヌスは黙示録の千年王国の伝承を現在化したのであった。

## 2-2. 現世における救済の未完性

前節でみてきたように、信徒の霊的な復活によって神の国はすでに始まっており、現在のである。しかし、それは部分的であって、全体に向かって成長しつつあるものである。そして神の国の最終的な完成は、最後の審判と身体の復活によって生じるため、歴史の彼方にある<sup>30</sup>。ここで明らかなのは、アウグスティヌスが現世における救済を未だ完全には至っていないものとして捉えているということである。以下では、アウグスティヌスがそうした現世の救済の未完性についてどのように語っているのかを分析する。

アウグスティヌスが現世における救済を語っているのは、主に19巻である。そこではローマ帝国であっても教会であっても、現世にあるかぎり完全には救済されないということが説かれる。まず、アウグスティヌスはこの世で幸福になろうとする哲学者たちを批判して、この世において完全に救済されることはないと主張する(19, 4, 4)<sup>31</sup>。そしてそれだけではなく、キリスト教を信仰している者であっても、現世においては完全な姿になれないことを説く。本節では特に、後者の信徒の救いに焦点をあてて考察する。

### (1)現世における信徒の状態

アウグスティヌスによれば、キリスト教信徒は、この世において善人にも悪人にもふりかかる不幸の他に固有の苦しみをもっている。それが霊肉の対立である (22, 23)。肉の思いが霊に逆らい、霊の思いが肉に逆らい、欲することを行わず、悪しき欲望を完全になくすことはできない。霊が肉を完全に征服することは現世においては不可能である<sup>32</sup>。現世では、ただ肉が完全に霊を圧倒し、罪を犯させないほどに努力することができるのみなのである (19, 4, 3)。アウグスティヌスは、このことをわたしたちは「現在の罰せられたみにくい姿のなかで経験している」 (22, 21) と語る。このローマ書 7 章をもとにした人間の現実をアウグスティヌスはさまざまな箇所でも何度も強調する。

それゆえ、アウグスティヌスによれば、信徒の義(iustitia)は、それが来世における究極の善に関連づけられるために真の義ではあるが、それは徳の完成においてよりむしろ罪の赦しにおいて成り立つような義であるという (19, 10, 19, 27)<sup>33</sup>。この世における救済は、罪の除去といった消極的な方面にとどまる。真に自分が主人となり、積極的に徳を完成し、幸福となるのは来世で初めて実現することなのである<sup>34</sup>。

アウグスティヌスは、現世の救済が未完であることの根拠を他にもさまざまに述べている。ここではアウグスティヌス自身が明確にその根拠としてあげた聖書箇所を二つあげておく。

まず一つ目は教会における祈りである。それは、信徒が神に向かって、「わたしたちの負い目を赦してください。わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。」(マタ6:12) とゆるしを請う祈りである。アウグスティヌスによれば、この祈りの存在自体が現世の救済が未完であることの「証人」であるという。このような祈りは信徒にとっては欠くことができない。なぜなら上述したように、朽ちた身体のもとでは完全な仕方で悪徳を支配することができないからである。理性が悪徳と争い、なんとか支配できたと思っても、この弱さのうちになにもものかがひそかに忍び入る。口を滑らせて出た言葉や、つかの間の想念によって罪を犯すことがあるのである。したがって、この世においては完全な平和というものは存在しない。もしもそのようには考えず、神にゆるしを請う祈りなど必要ないという者がいるとすれば、その人は偉大な人間なのではなく、高慢によって膨れ上がり、得意になっている人間であるという。それゆえこの世では、神に自分の弱さへの赦しを乞い求め、与えられた善に感謝するところに、各人にとっての義が存在するのである (19, 27)。

二つ目の根拠として、ヨハネ黙示録の「神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もな

い。」(21:3-4)をあげる。このことは未来における来世の救済の状態を述べているのであって、決して現世の救済に際しての状態を述べているのではない。なぜなら、この現世の艱難の中では、救済されていたとしても、この世をまったく涙や苦痛なしに過ごしている者はいないからである。「むしろ、ひとは神聖であればあるほど、そして聖なる願望で満たされていればいるほど、ますます祈りの際に流れる涙も多いのである」(20,17)<sup>35</sup>。現に、神の国の住人である使徒パウロをはじめとする聖徒たちは、自分が養子とされて、自分の身体があがなわれることを期待して、心の中で嘆いている(ロマ8:23)(20,17)。それゆえやはり、この現世においてはまだ完全な状態ではなく、完全な平和が訪れるのはイエス・キリストによってなされる最後のさばきの時なのである。

さらに以下の言葉によって、いかにアウグスティヌスが現世の救済と来世の救済をはっきりと区別したいかがわかるであろう。

この世の時の間に、再生(新生)の洗礼によって上方から来たる神の恩恵により、天からつかわされる聖霊のうちに、その市民たちはしだいに成長していく。しかし、神の子イエス・キリストによって最後になされる神のさばきの結果、その神の賜物によって、古いものの痕跡はなにも残らないほどの、強く新しい輝きが現れるだろう。実際その時には、わたしたちの身体は古い腐敗と可死性から、新しい不朽と不死性へと変化するであろう。この変化を、(聖徒たちが)その王と共に千年の間支配している今の時に起きているものとして理解することは、あまりにも恥知らずであるようにわたしには思われる(20,17)<sup>36</sup>。

## (2)現世における信徒のあるべき姿

それでは、現世における信徒はそうした悲惨な世の中でどのように生きていくべきなのだろうか。こうした現世の中では、信徒たちは悪徳と戦いつづけることが求められる。悪しき欲望を滅することはできなくとも戦うべきなのである。この戦いは確かに苦しいものではあるが、この生の以前の状態はもっと悲惨であった。つまり何らの戦いもなしに悪徳に支配されていたのである。それに比べれば悪徳と戦うほうがよりよいことであるという。そして、この苦しみに満ちた戦いの中で、自分の力で勝利を得ようと願ってはならない。あるいは戦って勝利したことを自分の力に帰してはならない。それは神の恩恵に帰すべきなのである(21,15)。



また、アウグスティヌスはパウロの、「まことにわたしたちが救われたのは希望においてである。目に見える希望はもう希望ではない。見えるものをどうして希望することができよう。わたしたちがもし、見えないものを希望しているのなら、忍耐をもってそれを期待しよう。」(ロマ8：24, 25)を取り上げ、現世の救いは希望によるものだとする。

それゆえわたしたちは希望によって救われているように、希望によって幸福にされる。そしてわたしたちはまだ現在の救いをもたず未来の救いを期待しているように、まだ現在の幸福をもたず未来の幸福を期待している。しかもそれを、忍耐をもってするのである。なぜなら、わたしたちが言葉にならない仕方で享受するものがすべて存在し、もはや耐えなければならないものは何もないようなあの善に到達するまでは、わたしたちは辛抱強く耐えなければならない悪の中にいるからである。来たるべき世においてあるそのような救いは、それ自体が究極の幸福であろう (19, 4, 5) <sup>37</sup>。

現世において信徒たちは、完全な善に到達していないため、来るべき世の救い・幸福に対する希望をもちつつ、この世の悪を忍耐して生きるべきなのである。そして、そうした来るべき世の希望と関連付けて現世の生を用いるならば、現実においてというよりも、その希望において、この世においてもなお幸福であるということができるといえる<sup>38</sup>。それゆえ、この希望なしに現実に幸福であったとしても、それは偽りの幸福であり、それは大きな悲惨ではない (19, 20)。

以上、現世における救済が未完のままであるとするアウグスティヌスの主張を考察した。

### 第3章 来世における救済

前章では、アウグスティヌスが現世における救済の未完性を主張していることを述べたが、そこからアウグスティヌスは来世における真の救済を強く志向していく。その来世における救済とはどのようなものなのかについて本章では考察しよう。

#### 3-1. 終末に起こる現象

来世における救済について分析する前に、アウグスティヌスが、終末において何が起こり、救済される者とされない者がそこでどのように分けられると考えているのかを踏まえてお

く必要がある。それについてアウグスティヌスは、特に20巻において新約聖書と旧約聖書のさまざまな記述を基に述べていく。

現在はキリストと聖徒たちが支配する千年王国の時代であり、悪魔は捕縛されている。信徒たちは現在、この捕縛された悪魔と闘っているのである。しかし、ヨハネ黙示録 20 : 4-10 で描かれているように、千年王国が終わると悪魔は解放される。その時信徒たちは悪魔の奸計と狂暴をきわめて賢明に忍耐強く耐える (20, 8, 1-2)。そして、反キリストによる迫害も起きる (ダニ 7 : 24-25、黙 17 : 7)。その後、キリストが号令と大天使の声と神のラッパが響くなかを天から下る (I テサ 4 : 13-17)。するとまず、キリストにおいて死んだ人々がよみがえり、それから生き残っている者が、彼らと一緒に雲の上に引き上げられて、空中でキリストを迎え、主と共に生きる (20, 20, 1)。ここで起きているのがヨハネ黙示録で言うところの第二の復活である。これは身体の復活である。そしてその後に、キリストが善人と悪人をさばく最後の審判を行う (II テモ 4 : 1) (20, 20, 1)。

このようにアウグスティヌスは、聖書の記述を根拠に来世に起こる事柄を述べている。特に最後の審判が起こることを示す聖書箇所は多くあげられている。新約聖書の中の代表的なものとしては、イエスが語る小麦と毒麦の振り分けのたとえの箇所 (マタ 13 : 37-43) である (20, 5, 2)<sup>39</sup>。また、身体の復活とキリストの最後の審判が起こることの根拠として、旧約聖書の箇所も多く挙げられている<sup>40</sup>。

しかし当時の哲学者たちの中には、上記で述べた身体の復活を理性で理解できないものとして排除する傾向があった。そこでアウグスティヌスは身体の復活が起きうることを彼らに説得する形で論じる (22, 4-5, 25, 28)。プラトンによれば、靈魂は身体なくしては永遠に存在することができない。また、ポルフィリオスは聖なる靈魂は朽ちるべき身体には帰らないと語る。この二つの意見を融合させれば、聖なる靈魂は朽ちない身体にであれば帰らずだという結論になるだろうと述べる<sup>41</sup> (22, 25-28)。

この身体の復活が起こった後に、キリストによる審判が行われる。その審判はどのように行われるのかといえば、第一の復活、つまり現世において洗礼を受け、キリストを信仰したものは天国に行く。そして永遠の生命を得る。他方で、現世において第一の復活をなさなかった者、つまり信仰をもっていなかったものは断罪される (20, 6, 1-2)。

しかし、ここで注意しなければならない。キリストを信じて洗礼を受ければ、だれでも断罪を免れるというわけではない。アウグスティヌスは、パウロが姦淫や放縦などさまざまな不品行を並べ、「このようなことを行う者は神の国をつぐことはない」と述べていることから (ガラ 5 : 18-21)、教会の交わりのうちにとどまっていたとしても、邪悪な生活をしてい

る者は神の国に入ることができず、よって永遠の刑罰に入るほかないと述べる(21, 25, 4)。アウグスティヌスは、原罪を取り除くための新生児への洗礼を強調しはするが、洗礼はただの始まりの印のようなものであって、そこから漸次的に新しくなる必要があると説く<sup>42</sup>。「したがって、永遠の刑罰を免れたいと切望する者はだれでも、洗礼を受けるだけではなく、キリストにおいて義とされ(iustificetur)なければならない。こうして、真に悪魔からキリストへと移るのである(21, 16)<sup>43</sup>」。よって、目に見える教会に属する者がすべて永遠の至福を保証されるわけではない。第1章でも述べたように、問題は意志なのであって、悪しき意志をもつ者はどのように信仰告白しようとも、「地の国」の民なのである<sup>44</sup>。

そして、永遠の生命を得られなかった者たちが受ける断罪とは、永遠の地獄の火にさらされることである。それは復活した身体に苦しみを与え続けるが、死をもたらしことはない(21, 3)<sup>45</sup>。これが第二の死である。ここでは、魂が神から見放されているゆえに真に生きることにはできない。かといって死ぬことによって身体の苦しみから逃れることもできない。第二の復活のときに復活した身体は今のようないたため、そのことが可能になるという<sup>46</sup>。

こうした断罪の記述から分かるように、アウグスティヌスは万人救済説を説いていない<sup>47</sup>。この終わりのない永遠の刑罰はあまりに苛酷ではないかとの抗議に対して、アウグスティヌスは次のように答える。それは聖書を自分勝手に解釈した結果である。人間的な思いよりも神の権威である聖書の記述に従うべきである(21, 24)。また、最初の罪によっていかに重大な罪が犯されたかを悟るべきである。最初の罪によって人類全体が断罪された塊になったために、神の恩寵によらなければ救われることはない。そして、憐れみ深い神の恩寵によって救われる人がいるという事実に対して神に感謝すべきである(21, 12)。

### 3-2. 来世における救済のあり方

次に、来世において救済される者、つまり永遠の生命に与る者は、いかなる救いを得るのかについて以下で分析していく。それについては主に最終巻である22巻に書かれている。アウグスティヌスは、来世における最終的な幸福について以下のように語る。

あの最終の真実なる平和においては、・・・・・・不死性と不滅性によって癒された人間本性はどんな悪徳をも所有しないであろうし、わたしたちのうちのだれひとりとして他の人とも自分自身とも対立しないであろうから、理性が、もはや存在しない悪徳を支配する必要はないであろう。しかし、神は人間を、魂は身体を

支配するであろうし、そこでは生きることと統治することの幸福が多くあるのと同じくらいに、服従することの甘美さと幸福が多くあるであろう。そしてこの幸福は全体においても個々においても永遠であろうし、その永遠なることは確実であろう。それゆえに、この幸福な平和と平和な幸福は最高善であるだろう(19, 27)

48。

まず、来世の救済を享受することによって秩序が正しくなる。神が人間を支配し、魂が身体を支配するという秩序である<sup>49</sup>。人類始祖にさかのぼると、人間は神に背くことによって自分の身体を魂が支配できなくなった。そして人類に「死」が入ってきた。これが罪に対する罰であった(13, 3, 13, 23)。それが来世の救済によって、正しい秩序と支配が生じる。つまり人間が神に服従することによって、人間は自分の身体を魂によって支配することができるようになるのである。その支配関係は苦しいものではなく、甘美なものである。そして、その正しい秩序関係によって罰としての「死」がなくなるのである。つまり、死すべき動物的な身体はなくなり、身体が不死性、不滅性を帯びる。

そして、あらゆる部分が意志に従う、霊的な身体になる(19, 17, 22, 21, 22, 24)(この霊的身体は身体であって霊ではない)。これはパウロの「魂的な身体でまかれ、霊的な身体によみがえる」(I コリ 15 : 44)を根拠としている。現世の人間の身体は肉的な身体であるが、それが魂的な身体ではなく、霊的な身体となるのである<sup>50</sup>。その理由を以下のように述べる。人祖アダムは魂的な身体につくられた。魂的な身体とは、人間の魂により生かされ支配されている身体を言い、霊的な身体とは、人間のうちに分裂と対立がなく、霊により導かれ、浸透されていて、肉と霊の調和が実現している状態をいう。キリストの復活体はどちらであったのかと言えば、後者の霊的な身体であった。それゆえ、復活においてはアダムのような魂的な身体に戻るのではなく、それよりも良い状態である霊的な身体に変わるのである<sup>51</sup>。そうした身体をもつことによって、悪徳に支配されたり、それと戦ったりすることはなくなり、もはやその悪徳自体が存在しなくなる(19, 27, 22, 24)。そして、どんな罪も持たなくなるが(20, 26)、だからといって彼らが自由意志を失ったことを意味するのではない。そこでは「意志は罪を犯す喜びから解放されて、罪を犯さないことの喜びへと強く向かう」(22, 30)のである。人間は創造時においては「罪を犯さないことができる」(posse non peccare)状態であった。しかし、来世の救済の時には「罪を犯すことができない」(non posse peccare)状態になる(22, 1, 2)。

そして世界は、以上で述べたような不死なる身体に見合った性質に変わる<sup>52</sup>。朽ちる身体

に見合った朽ち果てやすい性質の要素は、大火災によって滅び、新しい天と新しい地が起こるのである。これは「それからわたしは新しい天と新しい地を見た。先の天と地は消え去り、海ももはやない。」(黙 21 : 1) を根拠としている (20, 16)。

また来世の救済は、個人の至福という観点だけでなく、聖徒たちの「交わりの生」という観点からも語られる<sup>53</sup> (19, 5)。完成した人の生は、天上の聖徒や天使たちとの交わりのうちにあるのである。個人においては自分自身との戦いがなくなるわけだが、同時に、そうした交わりにおいては他者との戦いもなくなる。つまり真の平和がある。他人から攻撃されることはもはやない。例えば嫉妬などはなくなる。天国においては、功績にたいする報いとして与えられる名誉や光栄の段階がさまざまあるが、人が他人よりも少ししか賜物を受けていないとしても、それ以上には望まないという賜物をも受けている (22, 30)。

そしてそこでは、神の賛美にすべての時が用いられる。今はやむをえない仕事のためにある肢体や器官も、霊的身体にあっては神の賛美のためにすべて用いられる。「神がすべてにあってすべてとなる」(I ヨハ 3 : 2) とは、「神はわたしたちの願い求めるものの終わりである」という意味である。神は終わることなく見られ、飽くことなく愛され、うむことなく賛えられる (22, 30)。そこにおいては神自身が存在と至福の源であり、共通の生命、食物である (22, 1, 2)。

そして、彼らは神を霊によって直視する。パウロが「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。」(I コリ 13 : 12) と述べたことが起こるのである。アウグスティヌスは聖書の記述を参考にしながら(II 王 5 : 8-27)、そこにおいては「あまねく存在してすべての形態的なものを統治する神」を霊的な身体を通して、どこにいても常に「透きとおるほどの明瞭さをもって」見るであろうと述べる (22, 29)。

以上、アウグスティヌスが来世の救済をどのように捉えているのかを分析した。アウグスティヌスはここで、現世の救済では起こり得なかったさまざまな救いが、来世において起こりうることを説いている<sup>54</sup>。アウグスティヌスは、そこで生じるであろう霊的な身体がどのようなものなのかを、自分の経験を基にして何とか説明しようと努力している<sup>55</sup>。しかし、非経験的なことであるため、軽率に語ることを恐れている (22, 21)。

## 結

本稿では、アウグスティヌスの救済論を『神の国』最終 4 巻を中心に考察した。アウグスティヌスは、未来に置かれていた千年王国を現在起きていると考えることによって、終末を

現在の捉え。救済は現在の教会において霊的復活という形で起きているのである。しかし、それは救済の一部であって、完全なる救済は、未来のキリストの再臨時においてしか起きない。このようにアウグスティヌスは、現世と来世の両方の救済を説いたが、やはり来世の救済における人間の完成の必要性を強調している。

こうした見解をアウグスティヌスは、聖書の記述を根拠として主張した。しかし、聖書の記述をただ紹介して述べるだけでなく、アウグスティヌス自らが信仰生活をしながら感じたことを踏まえて聖書を解釈している。特に、アウグスティヌスが自身の経験から強く感じているのは現世における信徒の霊肉の対立である。そこから人間の無力性が自覚され、来世に訪れる神の恩恵がなければ完成にいたることはないという主張が生まれている。こうした人間の罪性の自覚と神の恩恵の強調は、アウグスティヌスの後期思想の核心部分であり、それが晩年の著作である『神の国』においても中心的な問題としてあげられている。

そうした思想の中でも、特に、信徒の義が徳の完成ではなく罪のゆるしによって成立している(19, 27)という見解は、ルターの信仰義認論に決定的な影響を与えた<sup>56</sup>。しかし、アウグスティヌスの著作の中には、現世の救済に対して積極的な見解を述べているものも存在する。例えば、『神の国』を書き始める前年に書かれた『霊と文字』では、神の義により人間が現実に義人となっていく(つまり宣義ではなく成義)という発展的な思想が説かれている<sup>57</sup>。つまり、アウグスティヌスは初めから『神の国』におけるような来世志向の救済論を説いていたわけではなく、時が経つにつれて徐々にそうした方向に思想が向かっていったのである。金子によれば、それは罪性の自覚が深まることによって起こった変化であるという<sup>58</sup>。今後はこのような『神の国』の前に書かれた著作における救済論についても考察していきたい。

---

\* 凡例

・本文中の括弧内の数字で特に明示していないものは、Augustinus, *De civitate Dei*, Bibliothèque Augustinienne, Œuvres de St. Augustin 37. Desclée de Brouwer, Paris, 1960 におけるラテン語の巻, 章, 節とする。

・引用の訳出に当たり、松田禎二、岡野昌雄、泉治典訳『アウグスティヌス著作集 第15巻』教文館、1983年、および服部英次郎訳、『アウグスティヌス 神の国(五)』岩波書店、1991年を参照した。

・聖書の引用および略号は『聖書 新共同訳』(日本聖書協会)によった。

注

<sup>1</sup> 芦名定道、小原克博、『キリスト教と現代』世界思想社、2001年 153, 154頁。

<sup>2</sup> 松田禎二『アウグスティヌス：その生涯と思想』行路社、1993年、118, 211, 212頁。

---

<sup>3</sup> 服部英次郎『アウグスティヌス』勁草書房、1980年、164頁。

<sup>4</sup> 松田、前掲書、1993年、117頁。

<sup>5</sup> 同上、188頁。

<sup>6</sup> *Fecerunt itaque civitates duas amores duo, terrenam scilicet amor sui usque ad contemptum Dei, caelestem vero amor Dei usque ad contemptum sui.*

<sup>7</sup> アウグスティヌスに従えば、地上における人類の歴史（アダムの創造から世界の終末に至る期間）は六つに区分される。すなわち、(1)アダムから大洪水まで、(2)大洪水からアブラハムまで、(3)アブラハムからダビデまで、(4)ダビデからバビロン捕囚まで、(5)バビロン捕囚からキリストの誕生まで、(6)キリストの誕生から世界の終末までである。我々は今第6の時代にあるが、この時代の後の第7の時代では、ちょうど神が世界創造の第7日目に休息されたように、我々も神自身における安息日を与えられるという。(22, 30) (K. リーゼンフーパー『神国論』におけるアウグスティヌスの歴史理解〈中世哲学会『中世思想研究』25巻、1983年〉、182-187頁。)

<sup>8</sup> 「キリストとその教会なる神の国」(15, 26)、「聖なる教会である神の国」(18, 24)「この世において遍歴している神の国、すなわち教会」(15, 26、13, 16)などが挙げられる。

<sup>9</sup> この状況をアウグスティヌスは以下のように表現している。「そこでこの邪悪な世においては、この悪しき日々にあつては、……多くの見放された者たちが善人たちと混じっており、両者はいわば福音書の地引網の中に集められている。そしてこの世においては、あたかも海の中のように、両者は網の中で区別なく閉じ込められて泳ぐ。それは悪人たちが善人たちから分離され、神がその寺院においてのごとく善人たちにおいて、『すべてにおいてすべてとなる』(I コリ 15 : 28)、その岸部に達する時までである」(18, 49)、「神の国は世を遍歴している限り、秘跡の共同によっては自らと結ばれているが、聖人たちの永遠の配分においては自らと共にいないであろう者たちをもつ。」(1, 35)

<sup>10</sup> 宮谷宣史『アウグスティヌスの神学』教文館、2005年、305頁。

<sup>11</sup> 同上。

<sup>12</sup> アウグスティヌスのローマ史観の変化については次の文献を参照。R. A. Markus, *Saeculum : History and Society in the Theology of St. Augustine.*, Cambridge University Press, 1970. 宮谷宣史・土井健司訳『アウグスティヌス神学における歴史と社会』教文館、1998年。

<sup>13</sup> オリゲネスと同時代人であるヒポリュトスという人物が代表的である。

<sup>14</sup> Markus、前掲訳書、1998年、78頁。

<sup>15</sup> 宮谷、前掲書、2005年、298, 299頁。

<sup>16</sup> 同上、299頁。

その理由として Markus は、聖書正典に書かれてあること以外は誤りであるとするアウグスティヌスの確信からきていると述べる。(Markus、前掲訳書、1998年、62, 63頁。)

<sup>17</sup> 同上、192、193頁。

<sup>18</sup> 同上、191-199頁。

<sup>19</sup> C. Dawson, *A monument to Saint Augustine. Essays on some aspects of his thought written in commemoration of his 15th centenary.* London, Sheed and Ward, 1930. 服部英次郎訳、『アウグスティヌス—その時代と思想』筑摩書房、1969年、76, 77, 81頁。

<sup>20</sup> 教会と国家のあるべき関係性について、アウグスティヌスは以下のように語る。「それゆえこの天の国は地上を遍歴している間に、あらゆる民族から（その）市民を召し出し、

---

あらゆる言語の寄留者の社会を集める。そして、地の国の平和をもたらし、保っている習慣や法律や掟がどんなに異なっても、それを気につけないし、それらは異なる民族においてさまざまではあっても、地上の平和という一つの同じ目的に向かっているのだから、唯一最高の真なる神が崇拝されるべきだと教える宗教が妨害されないならば、それらのうちの何ものも廃止したり、くつがえしたりしないし、それどころかこれらを保持したり、これらに従ったりするのである。」(19, 17)

矢内原によれば、『神の国』全体を通して、この世における神の国と地の国との交わり、関係性についての社会科学的分析が不足しているという。その理由として二つあげる。一つは、当時の社会科学は今日ほど発達していなかった点。二つ目は、アウグスティヌス自身が政治や社会の問題を直接学問していないし、そもそもそれらについて興味をあまりもっていなかったという点である。(矢内原伊作、藤田若雄編、『矢内原忠雄 土曜学校講義 第二巻』みすず書房、1971年、482, 488頁。)

<sup>21</sup> 坂口昂吉『中世の人間観と歴史』1999年、創文社、23頁。

しかし12世紀頃の思想家たちは、経済的・文化的復興の兆しから、未来において聖徒たちが千年間の支配をするなどとは説かないにせよ、将来に何らかの形で宗教的新時代が到来すると考えた。その発展上にいるのがフィオーレのヨアキムである。ヨアキムは、未来に聖霊の時代をもうけ、教会と社会の刷新を待望した。アウグスティヌスの終末論は、その点で中世盛期の歴史意識とは違い、近代に近いものであった。(同上、23-27頁。)

<sup>22</sup> それゆえ、キリストが述べる「死人」は魂が死んでいる人のことになる。アウグスティヌスによれば、魂も不正や罪において死をもつ。それは神を信じない人の魂のことである(20, 6, 1)。

<sup>23</sup> 当時、前千年王国説は主流であった。例えばパピアス、エイレナイオス、殉教者ユスティノスなどによって説かれた。(安發和彰「再臨」、大貫隆、名取四朗他編『キリスト教辞典』岩波書店、2008年、428, 429頁。)

<sup>24</sup> 坂口によれば、アウグスティヌスの終末観が変化した外的契機として、410年の西ゴート族のローマ略奪といった社会的動揺があげられる。しかしそれと同時に、キリスト教の普遍的救済史的意義を異教徒やキリスト教徒に明示するためでもあったという。(坂口、前掲書、1999年、18-20頁。)

<sup>25</sup> Gerard O' Daly, *Augustine's City of God, A Reader's Guide*, Clarendon Press, Oxford, 1999, pp. 211, 212.

<sup>26</sup> 芦名、前掲書、2001年、98頁。

アウグスティヌスは聖書を解釈する際、文字通りの解釈を第一とし、不明瞭なものについては神の愛が現れるような比喩的解釈をすべきであるというスタンスをとっている。

(茂泉昭男「第5章 ラテン教父たちの聖書解釈」、出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史—新約聖書から宗教改革まで』1986年、日本基督教団出版局、188-201頁。)

<sup>27</sup> このような千年王国の解釈はドナティストであったティコニウスの説から採用したものであった。(金子晴勇『アウグスティヌスとその時代』知泉書館、2004年、206, 207頁。)

<sup>28</sup> Ergo et nunc ecclesia regnum Christi est regnumque caelorum. Regnant itaque cum illo etiam nunc sancti eius, aliter quidem, quam tunc regnabunt ; nec tamen cum illo regnant zizania, quamvis in ecclesia cum tritico crescent.

<sup>29</sup> こうした教会観は危険を孕んでいる。教会の混合体としての性格の認識が失われれば、



---

すぐに教会の絶対化を促してしまうからである。(芦名、前掲書、2001年、100頁。) 実際、こうした教会観は中世に引き継がれ、教会が神の恩恵につながりうる唯一の機関という傲慢な意識を生んだ(「教会の外に救いなし」)。教会は、その恵みの下でのみ、国家が相対的・自然的権利を得ることができると主張した。そして黙示録 20 章の霊的世界支配を目指し、僧職階層制、教皇を中心とした中央集権的構造を作りだすと共に、国家よりも優位な地位を獲得していった。(J. Moltman : *Das Kommen Gottes—Christliche Eschatologie*, Güterslor, 1995. 蓮見和男訳『神の到来』新教出版社、1996、Ⅲ章第 5 節。)

<sup>30</sup> 金子、前掲書、2004年、206頁。

<sup>31</sup> 19 巻におけるアウグスティヌスの現世の平和・幸福に関する議論は非常に重要な箇所と言われており、多くの研究がなされている。例えば、ジルソン著、藤木雄三訳『「神の国」論：アウグスティヌス、平和と秩序』行路社、1995年や松田禎二『アウグスティヌス：その生涯と思想』行路社、1993年などを参照。

<sup>32</sup> ローマ書 7 章の肉が霊に反し、霊が肉に反するというこの箇所は、後期アウグスティヌスの著作において何度も引用され、強調される部分である。ここで、パウロの霊肉の葛藤は、パウロがキリスト教を信じ、恩恵の下にいる中で起こるものとして解釈されている。しかし、はじめからそのように考えているわけではなかった。アウグスティヌスは、中期はじめの著作『シンプリキアヌスに答えた諸問題』において、この 7 章後半の人間は律法の下に立っており、恩恵に至る以前の生死に関わる苦闘の中にある古い人を意味すると説いていた。しかし、419 年にいたって従来とってきた解釈を突然放棄して、ローマ書 7 章後半は恩恵の下に立つ人間を描いていると説くようになった(『結婚と情欲』)。そして『ペラギウス派の二書簡駁論』ではこれまで採ってきた解釈はペラギウスの的であるとして、以前の解釈の誤りを公然と告白するようになった。こうして、現世においては欲望を完全に克服することはできないという考えにいたったのである。金子氏は、この解釈の転換は、彼自身の思想の深化や発展によっておこったものであると述べている。(金子晴勇『アウグスティヌスの恩恵論』知泉書館、2006年、155-157頁。)

<sup>33</sup> この記述は、ルター「義人にして同時に罪人」の思想に大きな影響を与えた。(金子、前掲書、2006年、269, 270頁。)

<sup>34</sup> 矢内原、前掲書、1971年、441, 442頁。

<sup>35</sup> cum potius quanto est quisque sanctior et desiderii sancti plenior, tanto sit eius in orando fletus uberior

<sup>36</sup> per huius saeculi tempus gratia Dei desuper veniente per lavacrum regenerationis in Spiritu sancto misso de caelo subinde cives eius ad crescunt. Sed per iudicium Dei, quod erit novissimum per eius filium lesu Christum, tanta eius et tam nova de Dei munere claritas apparebit, ut nulla remaneant vestigia vetustatis ; quando quidem et corpora ad incorruptionem atque immortalitatem novam ex vetere corruptione ac mortalitate transibunt. Nam hoc de isto tempore accipere, quo regnat cum rege suo mille annis, inpudentiae nimiae mihi videtur,...

<sup>37</sup> Sicut ergo spe salvi, ita spe beati facti sumus, et sicut salutem, ita beatitudinem non iam tenemus praesentem, sed expectamus futuram, et hoc per patientiam ; quia in malis sumus, quae patienter tolerare debemus, donec ad illa veniamus bona, ubi omnia <erunt> quibus ineffabiliter delectemur, nihil erit autem, quod iam tolerare debeamus. Talis salus, quae in futuro erit saeculo, ipsa erit etiam finalis beatitudo.

---

<sup>38</sup> アウグスティヌスの最後の著作『堅忍の賜物』には、救いを経験した者が終わりの完成にいたるまでの信仰者の歩み、いわゆる「中間時の倫理」を扱っている。ここでも「希望」は重要な概念とされている。アウグスティヌスによれば、神の予定によって将来のことは確実であるから、我々のなすことがすべて失敗し、絶望に終わることはない。だからキリストの身体である教会のうちに堅くとどまるべきであり、アダムのように神から離れることがあってはならない。(金子、前掲書、2006年、190, 191頁。)

<sup>39</sup> その他、マタ 11 : 22-24、12 : 41-42、19 : 28、25 : 46、ヨハ 5 : 28-29 も根拠として挙げられている。

<sup>40</sup> イザ 26 : 19、66 : 12-16、66 : 22-24、ダニ 7 : 15-28、詩 102 : 26-28、50 : 3-5、マラ 3 : 1-6、3 : 5-6、3 : 17-43 などが挙げられる。しかし、旧約聖書では、さばきがキリストによってなされることは、新約聖書ほど明確には述べられていない。キリストが来るといって代わりに、神が来ると述べられている箇所が多いという (20, 30)。

<sup>41</sup> アウグスティヌスも初期の頃には、こうした哲学者たちのように身体を低く評価し、魂の不滅の論証を積極的に行っていた。しかし時が経つにつれて、キリスト教的な思考が浸透し、身体を肯定的にみるようになり、それと同時に身体の復活を積極的に主張するようになった。しかし、魂の不滅を否定することはなく、代わりに神学的に主張するようになった。つまり、神が創造したものとして魂と身体の両方を善とする主張や、神の子の受肉は魂の不滅性に人間を導くためであるという主張などから、魂の不滅性を説くようになったのである。(金子晴勇『アウグスティヌスの人間学』創文社、1983年、59-69頁。なおアウグスティヌスの身体論の変遷については Margaret R. Miles, *Augustine on the Body*, Scholars Press, 1979.も参照。)

<sup>42</sup> William Harmless, S.J. 'Baptism', in: *Augustine Through the Ages: An Encyclopedia*. ed. by Fitzgerald, Allan, Cavadini, John C, Wm. B. Eerdmans Publishing, 1999, pp. 84-91.

<sup>43</sup> Quisquis igitur cupit poenas evader sampiternas, non solum baptizetur, verum etiam iustificetur in Christo, ac sic vere transeat a diabolo ad Christum.

<sup>44</sup> 服部、前掲書、1980年、191頁。

アウグスティヌスは『堅忍の賜物』の中で、来世において誰が永遠の生命に与り、誰が永遠の刑罰を受けるのかは人知を超えた問題であるという不可知論的な結論を下している。(金子、前掲書、2006年、190-192頁。)

<sup>45</sup> この地獄の永遠の火を霊的な比喩としてとる立場もあり、そうとっていいが、アウグスティヌスはこれを物質的に本当の火と解釈する方がなおいいとする。

<sup>46</sup> アウグスティヌスは、このことについては確かに信じにくいと述べる。実際信じない者たちが多くいる。しかし、彼らは自分が経験したことの無いものはすべて信じないという姿勢を固持しているとしてを非難する。そして、この世における人間の身体の感覚や経験からは推測できないものがあるはずだと主張する。(21, 3)

<sup>47</sup> ただし、アウグスティヌスは他の著作(『霊と文字』『聖徒の予定])で、キリストの贖罪によって実現した客観的な普遍的救済を認めている。詳しくは金子、前掲書、2006年、第6章を参照。

<sup>48</sup> In illa vero pace finali, ....., quoniam sanata immortalitate atque incorruptione natura vitia non habebit nec unicuique nostrum vel ab alio vel a se ipso quippiam repugnabit, non opus erit ut ratio vitiiis, quae nulla erunt, imperet ; sed imperabit Deus homini, animus corpori, tantaque ibi erit oboediendi suavitas et facilitas, quanta vivendi regnandique felicitas. Et hoc illic in omnibus atque in singulis aeternum erit aeternumque esse certum erit, et ideo pax

---

beatitudinis huius vel beatitudo pacis huius summum bonum erit.

<sup>49</sup> こうした魂の身体に対する優位性を説く思想は、男性の女性に対する優位性の主張につながるものであるが、これは後代に影響を与え、父権的思想の形成基盤となった。特に現代においては、そうした男女平等の観点からアウグスティヌスの思想に多くの批判が加えられている。アウグスティヌスを研究していく上で、この問題にどう取り組んでいくかは重要な課題の一つである。

<sup>50</sup> アウグスティヌスにおいては、魂と霊を同一のものとして語る傾向にあるが、「魂」は身体を生かす生命原理であるのに対し、「霊」は実体において魂と同じでも機能において相違している。自然本性としての「霊」は魂の理性的働きである。霊の働きによって、人間と動物が区別される。(金子、前掲書、1983年、93-97頁。)

<sup>51</sup> 同上、91, 92頁。

<sup>52</sup> アウグスティヌスはここでは宇宙的終末論に関する記述をあまり述べていない。

<sup>53</sup> アウグスティヌスの思想において、交わりのうちに至福状態の完全なる生を見出すという点は重要な要素である。アウグスティヌスは生涯を通して、キリスト者の完全なる共同体を求め続けた。回心の頃には、カシキアクムの別荘での、知的・宗教的関心をもつ友人たちとの共同生活のなかにこの共同体を見出しており、その後は、使徒たちがエルサレムで営んだ共同生活を規範とする修道生活のなかに見出していた。(Andrew Louth, *The Origins of the Christian Mystical Tradition. —From Plato to Denys—*, Clarendon Press, Oxford, 1981、水落健治訳『キリスト教神秘思想の源流—プラトンからディオニシオスまで』教文館、1988年、226, 227頁。)

<sup>54</sup> Miles は、ここでアウグスティヌスが現在の救済では不可能なことを強調し、来世の霊的な身体でなければできないことを書いているが、現在においてもできることがあるはずである、という認識が欠けているという。ここで Miles が挙げるのは、性差別や奴隷制などの社会問題の是正や、売春や病気、人口過多をもたらす誤った性欲の改善などである。(Miles, “From rape to resurrection; sin, sexual difference, and politics” in: *Augustine’s City of God : a critical guide*, ed. by James Wetzel, Cambridge University Press, 2012, pp. 88-92.)

<sup>55</sup> Miles, op. cit., 1979, p. 116.

<sup>56</sup> この点に関しては金子晴勇『ルターの人間学』創文社、1991年、第一部第四章を参照。

<sup>57</sup> 金子、前掲書、1983年、389, 390頁。

正確に述べると、『霊と文字』においては宣義の中に成義の思想が含まれて語られている。(同上。)

<sup>58</sup> 同上。

しかし、著作の対象や論争の状況に合わせて強調点が変わったという可能性も含めて分析する必要があるだろう。